

松本 博明 提出 学位申請論文

『折口信夫の生成』審査要旨

論文の内容の要旨

論者である松本博明は、元國學院大學折口博士記念古代研究所研究員であり、平成二年から平成十年にかけて折口信夫自筆原稿の調査と解読及び資料評価に携わってきたものである。そして、この間に得られた豊富な知見に基づいて発想、追究し続けてきた折口信夫研究の成果としてまとめられたものが本論文である。その研究課題の独自性については二つの特徴を認めることができる。第一に折口信夫が記述してきたノート、草稿、原稿の類は、いわゆる定稿や定本と呼びうる完成体が特定しがたく、書誌による公刊をみた後もなお本文は推敲され、そこに表現される思考もまた執拗な加筆訂正において新たに組み直されるといふ実態で

あることを明確にし、その記述の動きにおいてこそ折口信夫が志向した学問の実像を測定できるとしたこと。したがって、これらの記述行為総体を折口信夫テクストと措定した上で本文異同、加筆訂正、本文編集の背景などを詳細に追跡するという方法をとること。第二に、折口信夫評価において、国文学研究者、民俗学者という学問的業績評価と、歌人、詩人、小説家等の文学創作者としての評価の二重性に架橋すること。これは第一の特徴と連動して導かれるものだが、折口信夫にとってその生涯に亘って継続したおびただしい回数におよぶ旅と、その折々において詠まれていった短歌とが、学問形成の始原となる発想を醸成していったことが丹念に分析され、その学説の中核を成した文学発生論を、旅にある自らの実感において何度も把握し直し、練り直していく過程に確認していこうという方法である。いわば、折口信夫という人格が自らの言葉を発見し、表現へ組織立てていく過程に自己とともに見出される思想の具現化として、学問的思考と文学的創作を表裏一体のものとして考察しようという試みとすることができる。その上

で、このような折口信夫の学問・文学形成のありかたは日本近代の時空においてこそ生成したことを重視し、日本近代文学作品研究の対象となることを明記している。

第一章は「短歌の行方―様式・非短歌・生活・律・虚構」として第一節から八節にまとめられた考察であり、折口信夫にとっての短歌発生論を考察しながら、折口の短歌、学問の特質を概念的に把握しやすくしてしまった特徴的な用語、いわゆる「折口名彙」の概念規定を再検討し、その成り立ちを明らかにするものである。民俗探訪の旅を日本各地に行いながらその経験から表現へと生成していく言葉が、短歌の内部において独特な表情、用語へと収斂していく様態を草稿、未発表原稿などの錯綜状態から解きほぐし、かつ、折口用語と自律して認定されがちな代表的な語彙である「叙事詩」が、明治後半という同時代性とどう関係し合っていたのかが調査され、改めて折口信夫が定位した意味内容を評価する。また、「うみやまのあひだ」という言葉が、それが発動、生成、展開する過程にお

いて、短歌群と歌集と学問の領域を揺れ動きつつ定着されていったことを分析しつつ、創作面での核心部である短歌という様式さえも、折口にあつては懷疑され、否定され、さらに新たな様式への展開を模索する促しとして、まさに固定化しえない動きにおいて把握されていたことをも指摘する。さらに、短歌様式と近代性との接合が要請する問題として、短歌における虚構性の追究が、新たな「歌物語」の試みとしてあつたことを認定している。

第二章「折口信夫 小説の意味」ではこれまでほとんど研究対象として位置づけられてこなかった折口の初期小説群のテキスト批判と再評価に基づき、「生き口を問ふ女」、「口ぶえ」に見られる私小説としての指向性と、「神の嫁」から「死者の書」に至る学問的な知見に基づいた小説への指向性という二つの表現ベクトルを確認した上で、その核心部に想定される折口信夫の表現者としての内実、語りの様式を追究する姿勢を見出している。ここでいう私小説作品への指向性とは、折口の生育した大阪における生活環境と周囲の対人関係の中で生じた

独特な想い、精神的な問題が内面化され、極めて個人的な表現欲求を醸成し、その具体化として自伝的な物語、小説の創作へ赴かせたことであるが、それと同時に並行的に試みられていた学問、国学へ寄せる期待の実践、すなわち折口古代学の展開として評価される「身毒丸」から「死者の書」への創作過程においても、この私小説を書くという指向性が大きく影響を与えていたという考察をすすめている。この問題について第四節で、「生き口を問ふ女」における視線、まなざしの特権化を分析し、「神の嫁」には聴覚、音への特権化を指摘し、ほぼ同時期に試みられた二つの作品、内容的には大きな差異が認められる小説作品群に、見ることと聞くことという二つの身体感覚を特徴とする語りがなされていることを明らかにする。そして、この小説の語りの方法こそが、「死者の書」の改稿過程にも大きく関わり、折口文体におけるテンスとアスペクトの問題として展開可能な見直しを提案している。

第三章「古代研究への道」では、折口古代学の発生から展開への過程において、

折口を囲んでいた同時代の学問言説とどのように関係し、それをどのように受け入れて独自の学問思想へ発展させていったのかについて、草稿調査や本文の改稿過程などを丹念に辿りつつその実態を明らかにし、また、言語学・国語学の師であった金澤庄三郎、民俗学の師としての柳田國男との関係を調査し、彼らの影響下に育まれていった折口自身の学問形成の独自なあり方を考察し、折口の古代研究の思想的特質を分析しようとするものである。第一節「語部論」の揺籃―折口信夫の発生―は、折口古代学の核心部を形成している「音声への指向性」が同時代学問言説との関わりの中で「語部」概念として把握され、その内実の確定と自らの学的概念へとどのように成長させていったかを考察し、「語部」の語る「叙事詩」としての物語とそれが「律文」としての特権性を帯びた言語であるという展開のしかたを浮き彫りにしている。また、金澤庄三郎へ提出した大学生時代の論考には既に発生論的思考の形跡が認められること、柳田國男との複雑な関係を精査すると折口自身の民俗学、古代研究への方法論的自覚のありようが明確

になること、そして両者が共に使用した「郷土」概念の差異からも折口の古代への指向性が見て取れることを論証している。さらに日本文学の発生論には「とこよ」、「まれびと」に関する探究に基づいた「古代人の生活意識」の解明という裏打ちをこそ必要とした折口思想、その独自性を把握するには、おびただしい改稿過程の分析から見えてくる、学問と創作という課題への取り組みが必須であることを提言する。

終章「生成論の地平へ」は、これまで論者が取り組んできた折口テクストの実態解明作業が必然的に導出した研究方法の開陳であり、それは学問的な完成品として流通・消費されてきた従来の「折口学」という神話を解体し、そのテクストの示すように再流動化させてみようという提案である。この「改稿」と「推敲」という行為につきあうことは「台本のない劇を見るかのようにだ」と論者は述べ、「終わりのない無言の一人劇」の復元過程に「作者と作品との葛藤のシナリオ」を読み取り、そこに折口信夫の姿を見ようと決意している。

## 論文審査の結果の要旨

学位申請論文である『折口信夫の生成』は、「國學院大學折口博士記念古代研究所」に所蔵されている折口信夫に関わる遺稿類の調査、翻刻とその評価についての作業に基づいて発想されたものであり、自筆原稿、原資料等の本文異同関係や改稿過程の解明、加筆訂正箇所の確認、著書刊行後の再編集や自装本の様態などを厳密に調査するテキストクリティックを通して得られた新たな折口信夫像と、その学問・文学思想の表現者としてのあり方を追究しこれを提案するものである。また、これまでの折口研究や折口古代学として捉えられ、構築されてきた学問体系への異議申し立てを行うことを一つの目標とした論考でもある。具体的には従来から「折口語彙」「折口名彙」として本文から抽出され、学的概念としての定義と思想としての組織化が図られてきた特徴的な用語類を、いわゆる従来の折口学の文脈から、その用語が生起してきた同時代言説の中に解放してみるこ



と、すなわち、折口の学問形成過程において関係し得た学問体系の文脈を調査、検証することで折口学の内部に特権化されがちであった学的組織の基底部分の再検討を促すものである。この手続きは第一章第二節における「叙事詩」の概念を明治三〇年代の『帝国文学』における使用例の検討を通して考察するところ、また第三章第一節では「語部」論の発想と展開過程を同様に分析し、「語部」概念の流通状況と折口による意味づけの内実に迫ろうとするところに遺憾なく発揮されていると言いうことが出来る。

また、本論文は三章構成となっており、第一章では「短歌の行方」として折口の作歌活動の実態把握から、その表現動機を民俗採訪の旅における経験から立ち上がってきたこと、それが同時に学問的な思考の発想とも重なりつつその度毎に表出されていくことを明らかにし、折口信夫における創作動機と学問的発想の同時発生状況を跡づけていることは注目に値する。第二章では小説表現への模索の様相が検討され、この小説という表現様式に関わって、極めて私的な動機と学問

的な思考の具体化としての動機の二種が交錯しつつ「死者の書」執筆へと展開することを考察する。そしてさらに、この一、二章で注目されるのは短歌、小説のどちらに対しても、「非短歌」、「非小説」という既存の表現様式を逸脱しようとする指向性が折口において出現していると指摘するところであろう。第三章では、「古代研究」として成立する学問思考の初発からの道筋が考察され、「語部」論の発想と具体化の実態、柳田國男との関係のなかで「郷土」概念の独自の意味づけが果たされていく過程の検証、そして、いくたびも改稿されていく日本文学の発生論が民俗学的な構想の練り直しに基づいて具体化されていった様相を浮かび上がらせて、刺戟に満ちた考察となっている。

以上のように他に類をみない成果を提出した本論文ではあるが、いくつかの問題点も指摘せざるを得ない。まず、論考の全体を見通すべき問題提起とその意義を明確に示すべき記述が不足したまま、情緒的な表現に依存している面があること。同時代の学問言説との関係はさらに調査の拡張が必要であること。近代文学

研究という領域で折口を捉え直すというが、その近代文学研究のとらえ方が限定的であり、たとえば、折口のテキストの多様性や非決定性をそのまま受け入れる方法の追究などが欲しいこと。

こうした指摘事項についてのさらなる検討を求めたいと考えるが、論者が既存の折口テキストが孕んでいる問題点に気づき、まずはテキストクリティックの地道な作業を繰り返しつつ先の見えない迷路に果敢に挑んで来たことは誰の目にも明らかである。しかも、折口学という体系の伝説的かつ神話的な成立が、ほとんど制度として機能していた時代にあつて、原資料を調査できる特権的な立場にあつたからこそ、異議申し立て自体が極めて困難な状況であつたことも想像に難くない。そうした観点に立つても、本論文がこれまでの折口信夫研究に寄与する点とは疑いなく、かつ、今後の研究の方向性を大きく変える可能性を有し、豊富な問題提起を示しているものであることは疑いのないところである。

以上のことから、本論文の提出者松本博明は博士（文学）の学位を授与される

資格があるものと認められる。

平成二十八年七月二十日

主査 國學院大學教授 石川則夫 ⑩

副査 國學院大學教授 小川直之 ⑩

副査 國學院大學准教授 井上明芳 ⑩

副査 相模女子大學教授 高橋広満 ⑩

松本 博明 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十八年六月三日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	石川 則夫	Ⓜ
副査	國學院大學教授	小川 直之	Ⓜ
副査	國學院大學准教授	井上 明芳	Ⓜ
副査	相模女子大学教授	高橋 広満	Ⓜ